

五家七宗の基調を成した教外別傳の思想

保坂玉泉

一 時代思想としての教外別傳

中國佛教史の時代區分をなすと第一期後漢より東晉に至る（西暦一一五世紀）五世紀間は佛教翻傳時代で印度成立の諸經論が殆ど翻譯された、今期の僧侶はいづれも梵漢語學者、文字の法師たることを要した。第二期南北朝より隋・唐初に至る（西暦六一八世紀）二世紀間は教相判釋時代で、前代已翻の經論の思想内容を批判して全佛教の再新組織を建てた、從て此時代の僧侶はみな佛教思想家たることを要した。此教相判釋は印度思想と佛教教義とを分類批判するに、内外兩道、大小二乘、三一權實と淺深次第して、終に極まるところ頓漸の判教に到つた。大約頓漸の判教に佛陀說法の頓漸と機根悟入の頓漸との二様ある中一乘教の上に建つるのは後者の判である。最高度に發達した大乘一乘諸經典の研究者たちは自己選擇の經教をいざれも非漸唯頓なりと判定してその眞價を發揮するに努め、第三期唐宋（西暦八一一三世紀）の間、其

處に禪淨興隆時代を形成し、頓教の法門を信行實踐した。淨土教は佛教を難易二行聖淨二門に分類取捨して、自ら直往淨土の頓教なりと判釋し、密教又顯密二教の分類より自教を卽身成佛の頓教なりと判じ、禪宗は、教禪二門に分ちて教外別傳の禪は頓悟卽心成佛の教なりとし、何れも從來の釋迦教を漸教としそれを止揚或は超越して淨土・密教及び禪宗を確立し、それぞれ念佛・加持及び坐禪の行に因り頓速に開悟成佛するを目的とした。その内、中國にあつては禪宗が最も隆盛を極め中心的勢力を保つた事は言を待たぬが、その禪宗は第一期の文字經典の佛教を止揚し、第二期の教判佛教を超越したから、人口に膾炙せる「不立文字教外別傳」の造語は正に禪宗の時代相を表現するに適當であつた。

禪宗思想史を閲するに初祖達摩より六祖慧能に至る初期禪宗は教禪未分の思想なりしも六祖以後南頓北漸對立するや、漸教と頓禪、教意と祖意との同異優劣を比較し、竟に教外禪の思想盛行し、その教外禪の表現の差に因り五家七宗の分派

競い起り、唐宋五百年間禪宗の盛況を呈し中國禪（後に明かなる如く佛教中頗る異色ある）の完成を見た。後、他に此教外別傳の弊風に反動した異流別派には教禪未分の時代に復古し或は教禪不二を主張するものも起つた。要するに禪宗思想の變遷は教禪二門の觀方に因る、就中五家七宗に一貫して基調と成つたものは「不立文字教外別傳」の思想であつた。中國禪を開顯する唯一の鍵は「教外別傳」に在りといふのが本論文の主張である。

二 不立文字教外別傳思想の起源及變遷

嚴密に言えば「不立文字」と「教外別傳」とは形式上小異があつて、前者は經文を排し後者は教相を超越するもので共に經教の相對的形式を飛躍し止揚して佛法の眞髓を直觀し第一義諦に悟入せんとする意である。この思想は大乘經には夙に一字不說、離言說等の思想として存在していた。羅什譯『金剛經』に「須菩提、於意云何如來有_ニ所說法_ニ不、須菩提、白、佛言世尊、如來無_ニ所說」（如法受持分第十三）とあり。羅什譯『維摩經』（入不二法門品）の維摩の「默然無言」、文殊の「無_ニ有_ニ言語文字」の讚嘆の如き人の知るところ、『楞伽經』中、佛成道と涅槃との中間の說法四十九年に「不_レ說_ニ一字」（四卷楞伽卷三）とあり、又證智所行は「離_ニ言_レ說_ニ一字」（同二八二中）と云ふ。多子塔分半座の付囑を說相_ニ「離_ニ分別相_ニ」「離_ニ名字相_ニ」（七卷楞伽卷四）、「如實

智非_ニ在_ニ言說_ニ……莫_ニ著_ニ所說名字章句_ニ」（七卷楞伽卷三）、有名な「指月喻」（七卷楞伽卷六・七）などいずれも不立文字思想の始原である。難解難入なる楞伽境は文字語言を離れて始て悟入するを得る。

初期禪宗が依用した經典は主として前記『楞伽經』『金剛經』『維摩經』であつたから、それ等に基いて「不立文字」を禪の中心思想として確認使用した。乃ち『六祖壇經』には「聞_レ說_ニ金剛經、心開悟解故知本性自有_ニ般若之智、自用_ニ智慧常觀照故不_レ假_ニ文字」（般若第二・燉煌本大正藏四八・三四〇中全同）とし、『金剛經』を主用した六祖は般若によつて不立文字の思想を受け、素より文字を識らざる彼は却て不立文字の體驗に適し、彼は又、『涅槃經』常誦者姑無盡藏尼と問答して「諸佛妙理非_ニ關_ニ文字」と言い、尼を驚異せしめた（機緣第七）。黃櫱は『傳心法要』に於て「達摩大師到_ニ中國、唯說_ニ一心、唯傳_ニ一法、……法即不可說之法」（大正藏四八・三八一中）とし、『金剛經』の「三世心不可得」を說いた後「法身說法不_レ可_レ以_ニ言語音聲形相文字而求_ニ……故曰無_ニ法可_レ說是名_ニ說法」（大正藏四八・三八二上）と言つて『金剛經』の不立文字思想を傳承したことを口吻し、「故召_ニ迦葉_ニ同_ニ法座別付_ニ一心」（同二八二中）というて、多子塔分半座の付囑を記し、後の靈山付囑說の不立文字教外別傳の言を反證せるもの如く、「釋迦四十九年說、未_ニ嘗說_ニ著一字」（同二八五

中」と言う、前記『楞伽』の一宇不說の文を擧げたこと明かである。

斯く初期禪宗の「不立文字」の語及思想は前記諸經典から繼承したことは明かであるが、「教外別傳」の語文は殆んど見かけない。「不立文字」と「教外別傳」とはその眞意同一なるも、否定する對象の異りから成語内容が較々違う。初期禪宗は經典を依用し、經（教）禪未分の時代なるが故に第一義諦を表現するには「不立文字」の成語が適當し、次期五家禪宗興起時代には教相爛熟時代であるから、之を匡救し且つ止揚して新機を出した禪は「教外別傳」の成語を以て眞禪を顯わすことが相應しかつた。

五家隨一の義玄の『臨濟錄』（大正藏四七卷收）には「不立文字」思想の語句が横溢している。是等を拾つて見ると「釋尊云法離_ニ文字」「祇如_ニ十二分教皆是表顯之說……未_ニ免三界生死」「但有_ニ聲名文句皆是夢幻」、「看經看教亦是造業」、「三乘十二分教皆拭_ニ不淨」故紙、「真佛無形眞法無相」等々がある。日蓮が禪天魔論を叫ぶ所以である。『語錄』の中に、臨濟は自傳を敍して「往日曾向_ニ毘尼中_ニ留」心亦曾於_ニ經論尋討、後方知是濟世藥表顯之說、遂乃一時拋却卽訪道參禪、後遇_ニ大善知識、方乃道眼分明」（大正藏四七・五〇〇中）なりとし「不立文字」の體験を告白している。故に前記言行はその體驗から出たこと明かである。『臨濟錄』は小師

尾に同じく小師風穴延沼の「臨濟慧照禪師塔記」が追載された其中に、前記臨濟自傳の箇處が「毘尼……經論……非_ニ教外別傳之旨、卽更_ニ衣游方云々」（大正藏四七・五〇六下）と記されてあつて「不立文字」の表現が「教外別傳」に替り行き、追つて兩語が合體するに至つた系路が看取せられる。

次に『仰山錄』を見ると「師共_ニ一僧_ニ語、旁有僧云、語底是文殊默底是維摩、師云不語不默底莫_ニ是汝_ニ否、僧默……師云鑒_ニ汝來處、未_ニ有_ニ教外底眼」とある。『維摩經』の「不立文字」「離言默然」を教外別傳底に替えた點注意を要する。

越えて『雲門錄』の問話の題目を見ると、「如何是教外別傳一句」「如何是三乘教外一句」「如何是三乘教外別傳底事」「三乘十二分教說_レ夢」等々續出している。而して教とは三乘十二分教（經）を指す故、本來は「不立文字」というべきを「教外別傳」に言い替えられたことが察せられる。

斯く「不立文字」の思想が「教外別傳」の思想に飛躍し次で兩者合して「不立文字教外別傳」と聯句成語し、佛教の眞髓、禪の第一義諦を表現する代表的規格語となり、五家七宗一貫共通の basic 思想を形成した。

但し此一聯句が後二様に用いられた。一は祖師達摩西來の眞意を明かすために、二は靈山會上拈華示衆の「正法眼藏涅槃妙心」を敷演するためとであつた。『雲門錄』卷中には

三乘十二分教說夢、達摩西來說夢

とあり、『祖庭事苑』卷五には

佛法諸祖初以三藏教乘兼行、後達磨祖師單傳心印破執顯宗、所謂教外別傳不立文字直指人心見性成佛とあり、『碧巖集』第一則評唱には

達磨遙觀此土有三大乘根器、遂泛海得而來單傳心印開示迷途、不立文字教外別傳、直指人心見性成佛云々

とあり。何れも「不立文字教外別傳」が既に一聯の成句となつてゐた。達摩が中國佛教第三期の初頭に當つて來東せるも、經論を傳翻せず教判を建てず、唯止觀のみを専らにして從來の經師論師と趣を異にし、寧ろ前期二代の經教を遙に越えた特色を持したから、此一聯句は既往の佛法を指導すると共に達摩西來の意を明かにし、併て禪の眞髓を顯わすに適切なりとせられた。『臨濟錄』冒頭の元・郭天錫序文（大正藏四七・四九五上）に、

菩提達磨提三十方三世諸佛密印而來震旦是時中國始知佛法有教外別傳不立文字直指人心見性成佛厥後優鉢羅華於時出現、芬芳馥郁、一華五葉香風匝地云々

とあり、達摩の教外別傳底がその西來意であると共に五家七宗の基調となつたことを寓して、誠に箇の論意を得た文獻である。

三 不立文字の用處の誤

靈山拈華示衆に「不立文字教外別傳」の文句が這入つて來たのは遙か後の事である。靈山拈華付囑説は『大梵天王問佛決疑經』に由來することは周知のところであるが、此經では専ら「正法眼藏涅槃妙心」を付囑せりとのみ記して「不立文字教外別傳」の付囑は無い。此文が見出だされるのは恐らく最初で、後、『無門關』「世尊拈花」の則、及び、『五燈會元』「聯燈會要』（續藏一輯二編乙九套三冊二百二十丁右）の文が「世尊章」の文は多分『會要』の文を繼承したものと思われる、一犬虛を吠いて萬犬實を傳うるの類か。本來「不立文字教外別傳」の文は、前述の如く達摩西來意の標語であつて、語意から見ても拈華付囑の文言には相應わしくない。拈華付囑の偽説に更に頭上に頭を案ずるとせんか、竹頭接木と言わんか誠に拙作である。然るに後更に「直指人心見性成佛」の文まで採り入れて純禪を愈々複雜怪奇なものとした。早くも道元禪師は之を看破してか、『正法眼藏』「佛教」の卷に、ある漢いはく「釋迦老漢かつて一代の教典を宣説するほかにさらに上乘一心の法を摩訶迦葉に正傳す、嫡々相承しきたれり……この正傳せる一心を教外別傳といふ、三乘十二分教の所談にひとしかるべきにあらず、一心上乘なるゆゑに直指人心見性成佛なりといふ」この道取いまだ佛法の家

業にあらず出身の活路なし……

とあり。右文の「ある漢」に就て『正法眼藏參註』に

正傳上乘一心之法者、錯認馬祖語者道也、馬祖錄云師示

衆云、汝等諸人各信自心是佛此心卽佛、達摩大師從南

天竺國來至中華傳上乘一心法令汝等開悟……錯會

此箇眞文、直混濁人情誣罔正真佛法

と論斷す、果然「教外別傳」は達摩西來意を表せるものにして靈山付法の言にあらざること明白である。道元禪師の炯眼には驚嘆する。禪師は靈山付法に就て「正法眼藏涅槃妙心」の付囑は全面的に重用され、「眼藏」中にも四五箇處引かれた

が、「不立文字教外別傳」の文も、「直指人心見性成佛」の説も斷乎として肯わず、却て之を嚴正批判し口を極めてそは不合理なりと排撃せられた、之が「佛教」の卷の主意である。

蓋し「不立文字乃至見性成佛」の文は靈山付法の文ではなく又その宗意は遙に道元禪と相異していたからであろう。殊に「直指人心見性成佛」説は本來六祖慧能の中心思想であつて『壇經』には同意句が多く散見し、後人の作たる『少室六門』第六血脉論には達摩の教旨として擧げたものを集めて一聯の成語としたので、達摩の西來意を表顯するには穩當であるが、靈山拈花付囑説に付加したのは依然として拙策と言わねばなるまい。

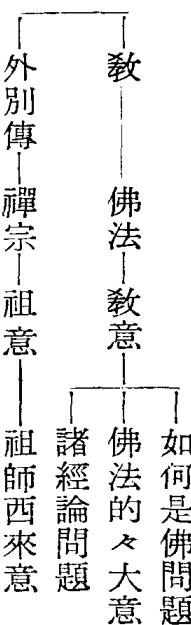
上來所論は教外別傳思想の變遷を概觀したのであるが、兎

まれ「教外別傳」の思想及語文は唐宋五百年間五家七宗の分派競起の裏付け否基礎づけをなした有力な思想であつた。

四 問題解決は祖師の獨創

五家七宗の基調を成した教外別傳の語文は師學問答商量の主題となり又多くの變形した同義語の問話を生じた。謂く、

教意祖意同別の問題、如何是佛の問題、佛法的々の大意、諸經論の問題及祖師西來意などが代表的なもので、五家七宗の祖錄中簇出している。その關係を圖示すると如次



これ等問話に對する師家の答話には教禪一致の立場を取るもの殆んど稀れで、多くは兩者を對立し優劣比較して佛法は淺く禪は深しと判断取捨し、又教意を解明するに一旦祖意に止揚し、更に祖意を提唱するに師家獨創の言行を以てした。自下諸師諸家の態度を擧げてみる。

教意祖意の問題。『臨濟錄』(大正藏四七・五〇三下)に王常侍は佛法を經と禪とに分ち、又『鴻山錄』(大正藏四七・五八〇下)では仰山の語として佛法を如來禪と祖師禪とに別け、前者は理解すべきも後者は「未夢見在」なりとし、雲居

錫は之に註釋して「如來禪は淺く祖師禪は深し」という。是等教禪抑揚の態度は五家共通の思想である。

『仰山錄』（大正藏四七・五八六上）では僧問の祖師意に對し、仰山獨特の佛相を空中に畫して答とした。『雲門錄』處々に佛意祖意、教中宗門事、教中の禪の問題に對し雲門は特異の奇言を弄し「餌餅」「乾屎橛」「屎坑裏」などと答え、問者を脳殺した。

如何是佛の問題。此問題も五家七宗で盛に擧拈せられた。

問如何是釋迦身、師云乾屎橛……問如何是超佛越祖之談、師云蒲州麻黃益州附子（雲門錄卷上大正藏四七・五五〇中）問如何是清淨法身、師云花藥欄……師云金毛獅子（雲門錄卷上、大正藏四七・五五二下）慧超答「和尚」、如何是佛、師云汝是慧超、（法眼錄、大正藏四七・五九一下）

何れも佛教の重要な問題たる「佛」の解釋を祖師禪に求む、奇言奇行を弄するより外はなかつた。

如何是佛法的大意、是れ亦佛教の重要な問題であるが禪家の師學は教相的解釋を欲せず教外の禪的答話を用いた。

上堂僧問如何是佛法大意、師豎三起拂子、僧便喝、師便打：

「師乃云大衆夫爲法者不避喪身失命、我二十年在黃檗

先師處三度問佛法的大意、三度蒙他賜杖」……如今更

思得一頓棒喫……（臨濟錄・大正藏四七・四九六下）

これが有名な黃檗三頓棒の機縁で、臨濟は自己の二十年來の經驗を再び學人に施して同じく棒喝を振つた。爾後此問題は叢林の名問話となつた。禪錄には到る處に擧せられてゐる。

經論の問題、不立文字教外別傳に基ける禪宗の學徒は却て從來の佛經の眞義を別傳の禪の立場から解説を要求した、乃ち舊佛經を新思想の禪で解決を欲した。禪錄處處で問題とされた經論は彼の『六祖壇經』所用の『般若』『維摩』『法華』『涅槃』等の大乘經が斷然多いが『雲門錄』卷下には前記諸經の外に、珍しくも『般若灯論』『瑜伽論』『百法論』『唯識論』『顯揚聖教論』が問題として取上げられたが、依然として教相的論釋を施さざるは勿論、何れも別傳の禪意を以て獨創的解説を作すのを常とした。『鴻山錄』に

師問「仰山、涅槃經四十卷多少是佛說多少是魔說、仰山云總

是魔說。（大正藏四七・五七八中）

とあるは極端な例で、教外禪を眞佛教なりと見るから、文字經教を心田の汚なりと貶するのか、禪天魔論の自認と云わんか。尙此等具體的經論の外に一般に經論なるものの看方、正否の價値、使用法などに就ても必ず禪的解答を下して憚らざる無情說法の話の如きは禪的經典觀の秀なるものである。

祖師西來意、教意と祖意とを並稱する中、祖意とは一般的

には禪宗々意をいうのであるが、代表的具體的には達摩祖師西來意であつて、古來禪門第一の問話である。以下二三の好例を舉してみる。

龍牙問如何是祖師西來意、師云與我過禪板來、牙過禪板與師接得便打、牙云打卽任打要且無祖師意（臨濟錄・大正藏四七・五〇四中）

師因僧問、如何是祖師西來意、……僧云借色明心附物顯理、……師拆開見畫一圓相內寫箇日字……仰山却畫一圓相於中書日字以脚抹却、師乃大笑（鴻山錄・大正藏四七・五七九下）

龍牙問、如何是祖師意、師（洞山）曰待洞水逆流卽向汝道、牙始悟厥旨（洞山錄、大正藏四七・五一四上）

問如何是祖師西來意、師（雲門）云青天白日寐語作麼（雲門錄・大正藏四七・五五一中）

五家代表的祖師の言行其軌を一にするものあり、隨て中國禪の性格が之に由て規定されたようなものである。

五 教外別傳思想を助長した事情

教外別傳の思想を外から助長した事情は一二に止まらず。第一地理的事情。佛教の傳來、經典の翻譯、教判の建立等を事業とした中國初・二期の佛教は北地の長安・洛陽等の都市を研修の中心地とした。この都市佛教教學的佛教と異なる第

三期唐宋の實踐的禪淨の佛教は、専ら南地に榮え、實踐の道場を山林に設け、所謂樹下石上の禪を擧揚した。前者北地都市佛教は文字經典教相裁判の佛教であるに反し、後者南地山岳叢林の禪宗は文字や經教に依學せず自然不立文字教外別傳ならざるを得なかつた。當時北地都市の教學的佛教は爛熟して新鮮味なく時代感覺を失い、剩え僧侶は政治に干與し道佛相爭い、素より伽藍と經典との有形の佛教は排佛法難の戰火に焼かれて舊態を失つた。反之遠く都を離れた山岳佛教の禪は都市佛教から超然として、水火に破壊されない無形の佛法を樹立することが出來た。自覺せる北地の僧侶は斷然文字經教の形骸佛教を捨てて南地に走つた。禪宗に南頓と北漸とを分つは北地都市の文字經教の佛教と南地山林の教外禪との對蹠でもあつた。斯くて禪宗の特殊の性格を造つた。

第二經論入手講讀困難なる事情。前代に產出した莫大なる經論疏は唐朝までは寫經寫傳せられ宋初より元・明代にかけ一切經の出版が十數回行われたが、經典の產出に伴つて相次ぐ中國の内亂や三武一宗の法難の爲め、多くの經論が燒盡して、一時はさしもの莫大な一切經も悉く烏有廢滅に歸し、早くは朝鮮から、近頃では日本から經典の逆輸入をなしたような始末であつた。然しこの經典入手困難の逆縁は、教外別傳を標榜し、經文不用を主意とする禪宗には順縁となつて、禪宗を益々發展せしめたのである。

第三、祖師修行の態度。初祖達摩は從來の經師論師と異り一經一論をも翻傳せず註疏講演せず、専ら面壁打坐を行じ、前辯の如くこの不立文字教外別傳の態度は祖師西來意なりとせられた。禪宗の大成者六祖慧能は初めから黃梅の碓房に在りて八箇月世務を行じ、本より不識文字不用文字にして經論を讀誦せざるも見性頓悟し、說法教化無盡藏であつた。斯く初期禪宗の代表的祖師の行的態度が後の五家に範を與え、不立文字教外別傳の禪風を匿き起した。達摩・慧能の行が不立文字の禪を文字通りに實證した譯であつた。

第四、大衆集團の叢林僧堂の修行。經師論師の講學者の基礎智識としては、言うまでもなく、梵漢兩佛教語と教相學修得が必要である。従つて何時の時代も經師論師は極少數であつた。五祖弘忍の頃から禪宗團が漸興し五百七百の大衆教團となり、學徒は上智下愚を論ぜず利人鈍者を簡ばず雲集した。一般大衆は無學無教育であつたから、師學共に經論講學不能でもあり不必要でもあつた。僅かに師家が大衆を集めて上堂示衆するも經論の講授全然無之、教外の禪語別傳の禪話を舉するのみ、又隨時箇人の問話に對しても師家は只自己獨創の答話を與うるのみ、故に自然に不立教外の禪が盛行した所以である。

又且つ大衆僧堂の生活に於ては衣食住は自給自足であるから、自然配役分業となり、耕雲種月運水搬柴の作務が其儘教

外別傳の禪の實踐修行となつて此作業作務の外に禪教も無く佛法の悟も無いといふ様に考えられた。慧能碓房の禪などは良き軌範となつた。

六 別傳禪の表現法

教外別傳の禪を五家の祖師は如何に表現したか、既に教外といふ以上、文字通りに從來の佛說佛語を用ゆることを敢てせず、舊佛教と異つた新機の言行を創意工夫せざるべからず、次に擧ぐる如く五家七宗の諸祖が競うて新機軸を發明し、各々門庭を施設した爲に五家七宗特意の規矩を立てたわけである。自下追て之を調べてみる。

(1) 無或は無事。

佛教殊に般若の空觀は中國の無の思想と合一し、次で禪を無或は無事の言で遮詮し、教外別傳の思想を表詮した。不立文字教外別傳の意が既に空無を表わす。前に擧げた『金剛般若』の空、『維摩』の默、不二の法門、『楞伽』の一字不說が空無の思想の淵源であつた。人口に膾炙せる達摩・梁武の問答の第一義、廓然無聖、不識の話は、羅什門下般若空觀の達者僧肇がその『涅槃無名論』を秦主姚興に上表する文中にあつたものを、何人かが達摩に假託した（忽滑谷博士禪學思想史卷上に考證した通り）。僧肇は遠く耆莊、近く姚興の無及無爲の思想に通曉せる上、羅什の般若空觀をば逸早く受け、中國

無の思想を以て之を表現した。空と言えば佛教、無と言えば禪、教外禪の第一義諦を表現するに中國の無字を以てすることが適切と見られ、爾來、「無」、「無事」の言行をば教外の最高禪を表現するものとせられた。

臨濟は第一義的禪者を「一生無事人」或は「無事是貴人」と云うて、それを自己の人格態度とした。

三乘十二分教皆是拭_ニ不淨_ニ故紙……爾若求_レ佛即被_ニ佛魔攝_ニ爾若求_レ祖即被_ニ祖魔縛_ニ爾若有_レ求皆苦、不_レ如_ニ無事_ニ（臨濟錄・大正藏四七・四九九下）

爾擬_ニ傍家波波地學得_レ於三祇中_ニ終歸_ニ生死_ニ不_レ如_ニ下無事_ニ向_ニ叢林中床角頭_ニ交脚坐上_{（同 大正藏四七・五〇〇上）}佛經を放下し佛祖を求めず一切無事にして只管打坐するに如かずとした。教外無事の禪とは打坐なること明かで、眞佛無形、眞法無相。（同上）

を悟ることを教外禪に直參する所以なりとした。禪祖にして無、無爲、無事を第一義諦として自行化他の方便とせざるものはなかつた。

(2) 一句。

雲門は佛法の諸問題を解するに唯一句を以て答話するを常とした。『雲門廣錄』には、

如何是正法眼、師云普。

如何是祖師西來意、師云師。

問三身中阿那身說法、師云要。

の如く廣錄上下に舉、嘆、祖、壘、怡、骼、鬚、吃等の一字關が澤山出でいて、一簇破三關の功をなす。是等一字句は、皆、必ずしも佛語に非ず寧ろ佛語を用いず、敢て中國字を用いて茲に教外別傳の一匁なることを示したものと思う。

(3) 規矩。

規矩とは佛教の法相教相の如き簡単な教理組織で、禪の理會や文學人指導の規矩準繩となるもので、『臨濟錄』によれば臨濟は獨自の工夫になる四料簡、三玄三要、四喝、四賓主、四照用など大體四句分別の論理形式を用い、洞曹一師は各その語錄によれば、正偏五位、功勳五位、王子五位、君臣五位等の各種五位説、洞山三滲漏、三路接人、曹山三種墮等を用いた。これ等の規矩はいずれも佛經の法相や佛教の教相以外の新機軸新術語であつて、二師は敢て教外別傳の意に順つて獨特の規矩を作成した。但し、法眼の六相義の如きは明かに『華嚴經』（晋譯卷二十三）から引用し必ずしも彼の新發明ではないが、その義解に至つては從來の教相佛語に依らず新禪語や中國語を用いた。斯く七宗各々教外の規矩を立し特異の宗風を競い唱えた。

(4) 符號。

鴻仰師資は種々なる圓相符號を用つて禪を標識擧揚した。『鴻山語錄』（大正藏四七・五八〇以下）に依れば、鴻山は五

指を以て地に一畫を作つたり、如意を用いて此○○相を畫したとある。弟子仰山に至つては盛に種々なる符號圓相を用了た。『仰山語錄』（大正藏四七・五八三上・以下）や『人天眼目』卷四（大正藏四八・三二一以下）鴻仰宗の條に依れば慧忠國師は六代相傳の圓相九十七箇を遺し耽源之を受け、次で仰山に授けたと記している。その圓相とは○相を始め、○相

の中に「佛」・「卍」・「水」・「牛」・「人」などの一字を記入したり、半月相や更に種々奇妙奇怪な符號を作つて學人を指導した、愈々出でて教外禪は却て益々不可解なものとなつた。兎まれ此種の符號標識は素より佛教以外のもので完く中國禪發明の新機軸であつた。

(5) 拂拳棒喝

德山は道得にも不道得にも三十棒を振い（臨濟錄・大正藏四七・五〇三下）、臨濟は黃檗の三頓棒下に打出せられ（同四九六中）、鴻山は資仰山に三十棒を放ち（鴻山語錄大正藏四七・五七八中）又仰山は僧の來るを見れば便ち拂子を堅起して發問（同・五八四上）、雲門も三頓棒を放つた（雲門廣錄卷下・大正藏四七・五七一上）。殊に雲門の用棒は氣勢甚だ大にして嘗て世尊の降誕に就て「我當時若見、一棒打殺、與狗子一喫、貴圖天下太平」（法眼語錄・大正藏四七・五九二中）

とあり、法眼之を評して「雲門氣勢甚大、要且無二佛法道理」^二と言つた。奇言騎行とせんや、硬強豪氣な提撕、險峻な教育

指導振なりといふべく、兎まれ法眼の批評の如く教外の禪なれば佛法の道理無きか。喝は禪家舉つて放つたところなるも、特に臨濟の四喝の如きは用處各々異り、學人檢問指導の方法として機を弄するに妙なりとせらる。拂拳棒喝奇言奇行は教外禪の特色として盛行した。

(6) 中國文學の重用。

外來宗教文化を自國語で表現書記することは自ら然るべきであるが、況して教外別傳の禪を佛語經文以外の文學で表現するためには勢い中國僧は自國語漢文詩偈を用いなければならぬ。便ち前述の如く先ず老莊思想を有する『肇論』は禪に採用された。法眼文益は行脚の次、地藏の處に至り同行「三
人舉_ニ肇論_ニ至_ニ天地與_ニ我同根處_ニ地藏云山河大地與_ニ上座自
己_ニ是同是別_ニ師云別_ニ」（法眼語錄・大正藏四七・五八八中）
といふ。又『法眼錄』に「師後住_ニ清涼_ニ上堂云……不_レ見石頭和
尙因看_ニ肇論_ニ云會_ニ萬物_ニ爲_レ己者其唯聖人乎、他家便道聖人
無_レ己靡_レ所_レ不_レ己」（法眼錄・大正四七・五八九中）とあり。
石頭の『參同契』は『肇論』の思想を承け、法眼はその唯心
唯識の禪をば『肇論』に依て解説した。『肇論』が般若空觀と
老莊の「無」とを合一して中國禪の興起に寄與した點甚だ廣
い。

又禪家では直接老子の家語を用いて禪を表現した。『肇論』涅槃無名論第四、表上秦主姚興の文に

僧肇言、肇聞天得、一以清、地得、一以寧君得、一以治天下、

四七・五八七上) (卦象は筆者自註)

(大正藏四五・一五七上)

とあるは本『道德經』より出す。道元禪師も亦之を用ひ。

朔旦冬至上堂、天得、一清、地得、一寧、人得、一安、時得

レ一陽(興聖寺語錄・永平廣錄卷一)。改三^{大佛寺}稱^{永平}寺^{一上堂}_{寛文四年丙午六月十五日}天有^レ道以高清、地有^レ道以厚寧、人有^レ道以安穩……永平有^レ道大家證明、良久云、天上天下當處永平(大佛寺語錄・永平廣錄卷二)

兩文俱に『道德經』から採つたことは明かであるが特に後者は直接肇論の文を應用せられたようである。

次に禪家特に曹洞宗は周易を以てその五位説を解明した。文學的には寧ろ周易の卦象などから五位説を導入し發明した

と考えた方は適切かと思われる。洞山は自作『寶鏡三昧』に「重離六爻偏正回互疊成^レ三變盡爲^レ五」と云い、正偏五位と易の變化とを合説した。その原理は周易陰陽兩爻を偏正二位に對照したものである。『曹山錄』(大正藏四七・五二七上)では、陰一陽一兩爻を黒●白○の圈相に替え、更に組合せて五圈相を作つて正偏五位、君臣五位、功勳五位などに配した、陰陽兩爻を組合せて八卦を作ると同様である。

師(仰山)問三僧、汝會^ニ甚麼^ニ云會ト、師提^ニ起拂子^ニ云、這箇六十四卦中阿那卦收、僧無對、師自代云、適來是雷天[。]大莊^(☰☰☰)如今變爲^ニ地火明夷^一 (☲☲☲) (仰山錄大正藏

曹山が周易に精通していたことは勿論であるが中國僧がその古代哲學を應用して教外の禪を表わすことは自然であつて無理がない。

外來の佛教思想をば中國在來の儒道二教の思想を以て説かんとして三教習合の機會を作り佛教と中國文學を融會し、次で専ら中國文學のみで佛教を表現せんとし、遂に中國佛教の獨立を致したのが禪宗である。五家七宗の語錄を披見して奇異に感ずることは、同じ佛教書であり乍ら、全卷殆んど中國漢語文のみで充たされ、佛教專門語句は極めて少く、純佛教經論に親んでいる學者に取つては全く別世界の異宗教を見る感がする。

乃ち前記五家の四料簡、四賓主、五位、六相等の規矩を解説するに漢文詩偈を以てした。斯くして禪宗詩偈が盛行し、獨特の禪文學を形成した。五家禪錄を輯集した『人天眼目』は完く禪偈詩文集の體裁をなしている。例えば

僧問、如何是奪人不奪境、師云、煦日發生鋪地錦、嬰兒垂髮白如^レ絲………

僧問、如何是奪境不奪人、師云、王令已行天下遍、將軍塞外絕^ニ烟塵………

(人天眼目卷一、大正藏四八・三〇〇中)

正中偏。三更初夜月明前、莫^レ怪相逢不^ニ相識、隱々猶懷^ニ昔

日嫌一

偏中正。失曉老婆尋古鏡、分明覗面更無」他、休更迷頭猶認影（人天眼目卷三、大正藏四八・三一四下）

宗祖已に然り、門下法系の諸人師は禪の舉揚とし云えど専

ら宗祖の言行規矩をば詩偈を以て理會し亦詩偈を以て他に示教した。不立文字教外別傳の禪は佛經教以外の漢詩漢文で表現するようになつた。從て禪宗の師學は共に佛教に精通せざるも詩文さえ學得すれば、禪の授受が容易になり又一般在家學者も佛教の素養なくも禪關を叩くことを得、禪門の居士は雲衲に伍し否寧ろ先進して禪に參じた。從て禪宗諸山の外護者も多く、住寺の晋山式等には顯官州知事等が參列し、又歸崇の祖師の語錄編集出版等には慶喜して序贊など寄せたものである。一般雲衆も難解な佛語を知らざるも自國語文で説かれる禪には入り易く解し易いため、舉つて禪院に參じたものである、不識文字の慧能はその好例であつた。

(7) 威儀卽佛法

教外別傳の禪風は只管打坐を專一にするは勿論なるも坐禪外の日常の行住坐臥などをも坐禪の動的應境的活現なりとし威儀卽佛法を認めた。只管打坐の達摩も慧可の禮拜に吾が體を得たりと證明し、永嘉玄覺は「行亦禪坐亦禪語默動靜體安然」と唱えて師六祖慧能の戒・禪・解脱に拘らざる佛法を宣べた。五家七宗の五百七百の大衆の教團叢林に在りては僧堂

生活は自給自足の制に依り、從て知事・配役・分業各々異り、念佛、看經、禮拜、打坐等遍く專修する能わず勢い平常の行住坐臥を直に禪なり佛法なりと見るに至つた。然し實際は此境地に到ることは容易でない。『鴻山錄』に

師方丈内坐次、仰山入來、師云寂子近日宗門令嗣作麼生：在、師云到這田地也難得。（大正藏四七・五七九上）

とあり。又同書に依れば鴻山師睡より起き、偶々仰山・香嚴二子に原夢せしめして前者は直に一盆水を取り來つて鴻山に洗面せしめ、後者は次で點茶し來て師に獻ず、師鴻山は「二子は鶯子よりも優れたり」と激賞した話は、行の佛法の範たるを失わず。果然、香嚴は直後、除草清掃の行處擊竹の聲を聞いて省悟した。

『雲門廣錄』卷中に曰、

舉睦州喚僧、趙州喫茶入水之義、雪峯輦毬、歸宗拽石、經頭以字、國師水榎、羅漢書字、諸佛出身處東山水上行、總是向上時節（大正藏四七・五五九上）

日々生活中の行持その儘佛法の悟、第一義諦とす、教外別傳の禪は行へと展開した。

(8) 作務是宗旨

五祖弘忍會下には三百五百の大衆あり各作務を分擔す、偶々慧能來つて看經せず坐禪せず八月確房に在り搗米作務して

悟道す、故に後日彼は説いて「不論禪定解脱」「心平何勞」
持戒行直何用修禪」（壇經疑問章）

と云い、作務是れ宗旨なる規範を示した。後叢林僧堂では耕田植樹、運水搬柴、淘米作飯の作務を分擔分業し或は普請し師學同行し百丈一日不作一日不食の誓願の範を示し、此作務の間に佛法を擧揚又商量し或は作務その者を直に禪行なり悟道なりとした。

栽松道者と言われた臨濟は

師栽松次、黃檗問、深山裏栽許多作什麼、師云一與山

門一作境致、二與後人作標榜。（臨濟錄、大正四七・五

○五上）

栽松卽二利の菩薩行である。

石霜會下有三禪客到云、此間無一人會禪、後普請搬柴、

仰山見三禪客歎、將一槧柴、問云還道得麼、俱無對。（鴻山錄・大正藏四七・五七九中）

古人は不會禪者を指導するに運水搬柴を以てした、佛世槃特の事に似たり。

鴻山一日指田間師（仰山）、這丘田那頭高這頭低、師云却是這頭高那頭低……師云水無定、但高處高平低處低平。（鴻山錄大正藏四七・五八二中）

師資、田園中にも佛法の叩唱を怠らなかつた。

陸希聲相公欲謁師先作此○相一封呈……公見卽入山……

五家七宗の基調を成した教外別傳の思想（保坂）

又問、和尚還寺、戒否、師云不持戒、云還坐禪否、師云不坐禪……師云聽老僧一頌、滔々不持戒、兀兀不坐禪、礮茶三兩椀、意在鑼頭邊。（仰山錄・大正藏四七・五八四下）

耕田喫茶の外に佛法も禪もないとの意。

その他百丈の普請、趙州の茶、仰山直歲、洞山飯頭、青林の栽松、洞山守初の麻三斤、青原の米價等多々の機縁禪話は何れも日々作務の間に佛法を商量し又直に禪門の悟道なりとした。

(9) 無情說法

佛教には古來法身說法の說あり、又反對に法身不說法家あり。前の法身說法の義が禪家に採用されて無情說法の說となつた。『洞山錄』に

無情說法話……華嚴經云刹說衆生說三世一切說……彌陀經云水鳥樹林悉皆念佛念法……師於此有省乃述偈曰也太奇也太奇、無情說法不思議、若將耳聽終難會、眼處聞時方可知。（洞山錄・大正藏四七・五〇七中）

無情說法を創唱したものは忽滑谷博士の説（禪學思想史上卷四四二頁）によれば南陽なりといふ。而して彼が語錄には無情說法の典據として『華嚴經』（晋譯第三十三卷普賢菩薩行品）を指摘した。洞山は嘗て鴻山に参じて慧忠の無情說法の話を擧唱問答し（故に前記洞山錄の記事となつた）、後、洞山

は雲巖の處に至つて復た無情說法の話を敲唱したが、

師猶涉_レ疑、後因過_レ水睹_レ影大_ニ悟前旨_ニ有_レ偈云、切忌從_レ他

覓、迢々與_レ我疎、我今獨自往處々得_レ逢_レ渠、渠今正是我、

我今不_ニ是渠_ニ應須_ニ恁麼會_ニ方得_レ契_ニ如如。」（洞山錄・大正藏四七・五一〇上）

此過水悟道は正に無情說法の體得によるや明である。雲門

にも無情說法の話がある。

師有時拈_ニ拄杖_ニ打床一下云一切聲是佛聲一切色是佛色（雲

門錄卷中・大正藏四七・五五五下）

師有時云我尋常道一切聲是佛聲一切色是佛色（雲門錄卷中・大正藏同上・五五九上）

東林常聰に參禪し無情說法の話の提撕を受けた文豪蘇東坡居士が翌日廬山の勝景に打たれ直に「谿聲便是廣長舌山色豈非清淨身云々」との悟偈を作り師に呈した。此秀作は前記雲門の語を更に具體的に表現した感がある。道元禪師にも「谿聲山色」「無情說法」の卷がある。要之不立文字の禪は天地無字の經を讀破するを要し、教外別傳の禪は無情說法によることが自然である。

七 教外別傳思想の得失

教外別傳の禪風は中國の時代と地理と思想とに順應したため全土を風靡し、唐宋五百年間の佛教を形成し、中國上下の

思想及教學を指導したが、其效果は功罪利害相中半するものがあつた。

(1) 不立文字教外別傳の思想は、經典の一字不說、指月喻などの意圖に習つて、超越せる高度の佛法を達觀するに妙なる考であつたが、然し爲に經論を無視し教相を排除し、學徒は無學に墮し、師家は暗證の禪師たるを免かれなかつた。

(2) 佛法の眞髓たる禪を實踐體驗するには、離言絕慮たるを要す。師家が學人を接得するにも教相學の如き注入教育を排し開發主義の教育指導を要するが故に、教外不立の指導方法は適當なりとするも、下根愚鈍の禪人はこの硬教育に不堪、不得要領、如魯如愚、禪は不可解に了る懼なきにあらず。

(3) かく禪は難解難入の故に、師家は餘儀なく挖泥滯水、方便作略を設けて、種々なる規矩を立し様々なる圓相を以て圖解し、拂拳棒喝等の非常手段にうつたい、奇言崎行を弄し、學人を巧に指導し、容易に開悟せしめたるが如きも、多くは偶然亦稀有にして單に一時の止啼錢たるを免れず、殊に無形の禪を形色に顯わすを以て往々學人の誤解迷信を招いた。

(4) 奇言崎行は經論を越え教外別傳の禪の第一義諦に相應するが如きも、外形甚だ狂態にして常識を以てその意を把握し能わずしてその形を眞似て得々たるものは所謂野狐禪に墮し、徒に慢心のみ高く、爲に自他を誑惑して省みない。

(5) 別傳の禪を表現するに強て佛語を避けて中國漢語文を

以てせし事も利害交々である。自國語で外來の佛教を表現するは、自國佛教の獨立、禪の普及を促進し、國民宗教文化の盛況を將來し、中國人は難解なる佛教の素養なくも自國語文に通ずる者は容易に佛門に入り禪關に參進することが出来る。この要求に應じて禪宗は漢詩漢文による偈頌を產し特異の禪文學なるものを創造した。

斯く文字禪の成立は本來不立文字を定判とした禪が却て新に文字に墮し、經教を排し乍ら多々益々禪偈語錄を產出し、教外禪の性格を一變するようになり、反面印度本來の根本經論を無視し忘却して禪者は天魔外道の譏を免れず。又文字禪は僅に知識層の僧侶官吏などに理解さるに止まり、一般僧俗は無學無禪に墮す。偶々文字禪を解するもそは知解分別の概念禪を得々とし、指を執して月を觀ざる經教の弊を再び新に冒すことになつたのである。

(6) 五家の師學は規矩という一種の教相を執し奇言奇行を弄し以て禪行とせる故、却て禪の本質たる只管打坐を閑却し、假令、參禪するも、從上祖師の言行を公案と稱し、その不可說なるを強て理解工天し、その悟解の印可を目的とする風が起つた。公案禪或は看話禪というものこれであつて、教相を超えんとして教相以下に墮し分別を離れんとして却て益々妄想を逞うす、これ正しく純禪なりとせんや。

(7) 禪が道儒を用い専ら漢詩漢文を用いたため、道儒は禪

を採り、禪は道儒を攝して、道禪一致儒禪習合の機會となり、宋末明初にかけて二程・朱子・陸九・陽明などの學風起り、禪の中國的使命を果たしたるが如きも、道儒佛一致は却て兩者共その純粹さを失い特色を缺き無力に墮した。

八 道元禪の立場

我國に傳來した禪宗は二十四流と稱せらる。中に於て二十一流は總て臨濟系に屬し、特に黃龍派は獨り榮西によつて傳えられ、他の二十流はいづれも楊岐派に屬す。曹洞に三派の傳あるも獨り道元禪最も盛行した。是等多くの派祖は中國僧の傳來者と日本僧の求法者であつて、彼我文運の交流に少からず貢獻したことは言を俟たぬが、前者臨濟系各派は五家七宗の禪をその儘直傳したもので傳燈禪と稱すべく、從て中國禪を忠實に師承せるも新味を加えず、反之道元禪は中國曹洞宗の系統に出でたるも其禪風に至つては遙に中國曹洞禪と異り、五家以前への復古禪を主張した。乃ち日本の臨濟・曹洞は、その禪風教義正に相反するに至つた。

日本臨濟禪は中國禪の直傳であるから前來述べ來つた教外別傳の教風を何處迄も維持し中國の五家七宗と毫も異なることがなかつた。我が五山文學なるものは是等臨濟系の五山の禪僧によつて打建てられた、而して五山文學の内容は義堂・絶海等の漢文學、雪村・絶海等の漢詩、虎闘・義堂等の漢文、

義堂・瑞隱等の日記、雪舟・明兆・周文等の繪畫、斗南・鐵舟等の書道など、殆んど中國文藝に基ける禪文藝で、漢學詩文の素養なくしては、佛教學者禪學者でも容易に講讀し能わざるところ、本より佛寺五山でありながら漢學の道場と化し、教外別傳禪の故に遺憾乍ら純粹佛教は五山に行われなかつた。結局五山文學は中國五家七宗の延長であつた。

然るに曹洞道元禪に至つては五家七宗と完く正反対にして教禪不二の立場を取り、近くは教禪未分の初期の禪便ち五家分派以前に還り、遠くは佛陀の正法に復古せんと努めたもので、『正法眼藏』や『廣錄』及『清規』等を繙けば、禪師が佛教以外に禪を認めず、廣く大小經律論を併せ重用され、特

に「佛教」の卷に於ては教外別傳不立文字の思想を批判排撃せられ、「佛道」の卷に在りては五家七宗分派の弊を指摘矯正、儒禪一致の惡風を諒しめられた。既に述べた如く、禪師は中國曹洞が教外別傳に基いて五位説を新設したことを充分承認し禪師歸朝に際し、淨祖より『五位顯訣』を授けられ、曹洞宗の傳統に屬しつつも、立教開宗に當り五家を背わず、曹洞五位を用いざるところは、教禪不二の復古禪を持せられたこと明かであつて、後、瑩山禪師が『十種勅問』第一問に教意・祖意は水波の如く一にして不二なる旨奉答せられた所以である。